

令和8年度 第3回掛川市立三笠幼稚園のあり方検討委員会
会議録（要旨）

日時：令和8年6月30日（火） 午後7時～午後8時30分

場所：掛川市立三笠幼稚園 1階遊戯室

出席委員：12名

欠席委員：2名

1 開 会

2 あいさつ

3 報告事項

事務局から資料を基に説明を行った。

(1) 第2回検討委員会での質疑や意見に対する回答

・周辺自治体における公立園の状況

(2) 三笠幼稚園保護者総会 検討状況報告の結果について

【報告事項に関する質疑】

質疑はありませんでした。

4 協議事項

(1) これまでの振り返り

(2) 検討委員会の方向性の確認

(3) 利活用に向けて

・報告書のイメージ

【協議事項に関する質疑】

(1) これまでの振り返り

【委員からの主な意見】

→質疑はありませんでした。

(2) 検討委員会の方向性の確認

ア こどもの数が減少し続け、定員に空きのある園が増えている状況を鑑みると、新たな園を整備する必要はないことについて

【委員からの主な意見】

→質疑はありませんでした。

イ 児童発達支援事業所の増加、市が3歳～5歳の一次療育を開始。園への補助金交付による障がい児の園での受入れ、最終的にはすこやかこども園が受け皿となることについて

【委員からの主な意見】

- 公立幼稚園には、民間では担えない「最後の砦」としての役割や、公立だからこそ守るべき

機能があるのではないかと、また1園だけが残る形になった場合にその1園で子どもたちを十分に受け止められるのか不安であり、その点について市の考えを伺いたい。

- 静岡県内の園の状況表を見ると、浜松市は人口に比べて公立園が多い一方、掛川市は公共施設再配置などを進めて公立園を減らしてきたように見える。そのため、公立園をここまで、しかも急いで減らしてきた政策的な理由を伺いたい。
- 県西部地域でも公立幼稚園に子どもが集まらず空きが多く、民営化も進みにくい状況である。大人への説明は重要だが、子どもには適切な集団規模を確保するスピード感も必要であり、説明に時間をかけるあまり少人数保育が続き、子どもは待ってられない。この状況は避けるべきである。令和10年までに結論を出すのであれば、少し先を見越して、急ぎ過ぎず適切な速度で進めている印象である。
- 公共施設の再配置計画をきっかけに、教育的事情との説明はあるものの、財政ひっ迫を背景に効率化を進めるのであれば、近隣市との比較や南部の認定こども園化の成果も含めてより丁寧な説明が必要であり、中山間地域の入り口にあたる重要な場所で公共施設をなくすことについては安易に了承できないが、他の使い道があるなら良いと思う。十分な説明が求められる。
- 全国的には幼児教育は私立への移行が進んでおり、県西部地域では公立園の統廃合が進まない中で少人数園の維持が難しくなって閉園に至った例もあることから、掛川市でも民営化や統廃合の進め方について地域の理解を得ながら対応する必要がある。
- 0歳から11歳までの子どもが市人口の約10%を占め、南部・北部の認定こども園を含む園配置を見ても、大東区域や西郷地区との比較で三笠地区だけ公立園がなくなることには、公共施設再配置計画の観点から違和感がある。
- 他市では中山間地域の公立園で満3歳児を受け入れるなどの努力を先に行っている。それでも集まらない場合に統廃合を進めるなど、必要な施策を講じた上で進めるべきだと考える。

【事務局の見解・回答】

- 児童発達支援事業所の整備が進み、療育や園の利用についても段階的に受け皿が整ってきている。地域園への移行については、すこやかこども園でも1号認定児の受け入れが可能であり、子どもの状態に応じて保護者と相談しながら支援先や通園先を選べるため、一定数の対応はできる。
- 市は、認定こども園制度創設前から同一敷地内で幼稚園と保育園を一体的に運営する幼保園を整備してきた経緯があり、掛川区域は認定こども園の制度にのせることが早かった。南部では公立幼稚園と保育園の民営化が進んでいたことも踏まえ、老朽化や再編を契機に検討委員会を開きながら法人による認定こども園化をスピード感を持って進めてきた。市としては、民間で担えるものは民間に任せ、補助金や委託により支援しつつ、かけがわ乳幼児教育未来学会等を通じて質の向上も図っており、対応策は整っていると認識している。
- 三笠幼稚園だけを見ると満3歳児保育の必要性は理解できるが、市全体では子どもの減少と既存園の空きがある状況で導入すれば、近隣園から園児が流れるため、既存園への影響も考慮すべきである。南部の認定こども園化は一体的な教育保育の提供や就労に左右されない利用、集団での交流、老朽化施設の整備など一定の成果がある一方、想定以上の人口減少で空きが生じており、今後は法人内統合や集約を視野に入れないと運営が難しくなる。

【まとめ】

新たな園は整備しないこと、また、マイノリティ、支援の必要なこどもの受け皿については、めばえやすこやかこども園や私立園補助による受け入れ、たけの子教室の拡充、民間の児童発達支援事業所などで確保していくという方向性を確認した。三笠幼稚園としては、三つの方向性の中で、廃園という方向性になることを確認したが、すぐに建物を取り壊すという意味ではなく、園として一定数のこどもの確保が難しく、再配置計画の観点からも閉園するということを視野に検討を進めていく、ということを確認した。

(3) 利活用に向けて

【委員からの主な意見】

- 「子育て支援の拠点として活用してほしい」
子育て世代が気軽に立ち寄れる場所が必要である。
児童館や子育て支援センターのような機能を持たせてほしい。
一時預かり、誰でも通園制度、プレパパ・プレママ向け教室なども実施できるとよい。
絵本、図書室、リユース品販売なども含め、親子が利用しやすい場所にしてほしい。
- 「子どもが安全に遊べる場が必要である」
近くに公園や気軽に遊べる場所が少ない。
夕方や雨の日でも使える、子どもが安心して過ごせる場所が求められている。
屋外遊具、木のおもちゃ、多目的室などを備えた総合的な遊び場を望む声があった。
- 「多世代交流や地域の居場所として使いたい」
子育て世代だけでなく、高齢者も含めた多世代交流の場にしたい。
地域の人が集まり、交流できる拠点になるとよい。
中山間地域の入口として、地域の明るい交流拠点になることが期待されている。
- 「療育・発達支援の場としての活用」
発達支援や療育の受け皿として活用できるのではないかという意見があった。
こども家庭センターや児童発達支援事業所と連携しながら、必要な子どもを支える拠点にしてほしいという考えである。
- 「教育・研修・園交流の拠点としての活用」
保育園・幼稚園の先生方の研修拠点として使う案があった。
幼稚園同士の交流や学びの場として活用することも提案されていた。
プールの共同利用など、既存設備を生かす案も出ていた。
- 「防災機能も持たせてほしい」
避難所として使える機能を持った複合施設にしてはどうかという提案があった。
長期避難には学校施設だけでは難しいため、別の受け皿としての役割も期待されている。
- 「市主体で進めるべきである」
地区まちづくり協議会や区長会任せにすると、担い手の偏りで負担が大きくなる。
民間単独では立地や採算面で難しいのではないかという懸念がある。
そのため、まずは市が方向性を示し、主導して進めるべきだという意見が多かった。
- 「公共施設再配置との整合も必要である」

公共施設の削減や再編との関係を丁寧に説明してほしいという意見もあった。

単に施設をなくすのではなく、跡地を子どもや地域のためにどう生かすかが重要とされている。

【まとめ】

少子化が急速に進む中で、子ども同士が一定の集団の中で育ち合うことが、非認知能力の向上を含め、今後ますます重要になる。これを踏まえ、利活用の意見として、子育て支援拠点、パンダひろばや支援センターの移設及びサテライト、療育施設、保育園・幼稚園教諭の研修拠点、一時預かりや誰でも通園制度、プレパパ・プレママ向け教室、図書室、リユース品販売、カフェなどを組み合わせた、子どもと子育て世帯のための複合的な拠点として活用することが望ましい。

また、現在の部屋数や地域の将来を考えると、単独機能ではなく、公園のように気軽に立ち寄れて、園からも地域からも幅広く利用できる場として再生し、市民による利活用を進めることで、子育てに夢のある施設へ生まれ変わらせるべきである。

5 その他

6 閉会